

コメント 「捨て石」としての小笠原？

Charles FOX

Charles FOXと申します。よろしくお願いたします。

実は正直に言えば、私はここで、みんなの前で、この二つの素晴らしい報告についてコメントをする資格はまったくないと思います。私は歴史家でもないし、哲学について何も知らないと言ってもいいぐらいのことなのです。

ですけれども、どうして私はこういう役をしようとしているのかというと、ずいぶん前ですが、私は北原白秋について論文を書いたことがあります。ご存じかどうか分からないのですが、白秋は大正3（1914）年に、3カ月ぐらいだけでも小笠原に滞在したことがありました。彼は引越すつもりで行ったのですが、現地の人たちとうまくいなくて諦めて内地の方に帰ったわけですね。

もともと行った動機の一つは、彼はスキャンダルから逃げようと思ったんです。人妻と恋愛した事件があって、大きなスキャンダルになったのです。しかし芸術的な動機は、彼は有名なフランスのゴーギャンのように、タヒチの原始的な生活を送っている原住民を探しにいったということですね。その時代の、はやりの一つなのですけれども。

もちろんのこと、彼は小笠原で、そういう人たちを見つけられなかったんです。見つけたのは帝国の政府に勤めている公務員、そして内地から経済的なもうけを狙って入植した日本人、そして、いま石原先生が言われていた、もちろん当時の言い方なのですが「帰化人」、いまで言うところ「欧米系」の人たちだけでした。白秋が探していた natives（土着人）に一番近く存在していたのは、この欧米系であったのですけれども、しかしゴーギャンが絵画で表したような natives ではなかったことが事実です。最終的に、白秋は小笠原関係の作品をつくったときに、小笠原に住んでいた人々を、ほとんど登場させませんでした。主に風景や雰囲気など、そういった作品ばかりになったわけですね。

ほかの芸術家も小笠原で、ゴーギャンのような原始的なタヒチを探しに行ったんですね。丸山晚霞や倉田白羊、前田政雄は木版画をつくる人なんですけれども、中島敦とか、外国人もダヴィド・ブルリューク（David Burliuk）など、そういった人が同じ動機で行ったのですけれど、もちろん誰も「タヒチ」を見つけられなかったんですね。見つけたのは、今日、石原先生が、よく説明してくれたユニークなところでした。

白秋にとって父島は、そんなに大切ではなかったけれども行ったから、私も行ってみたいと駄目だと思って、2009年の春に1回、父島辺りに行って見ました。おそらく白秋関係の記録や名残などといったものは、ほとんどないだろうと思って行ったのですけれども、やはり年月もたっていたし、白秋の人生にも芸術にも、そんなに影響を及ぼさなかったし、ましてや戦争中の破壊で記録も町並みも、もうほとんど消えていました。

私の勘が当たりました。何もなかったと言ってもいいぐらいです。でも行ったおかげで、この欧米系の存在に初めて気付いたわけですね。それは振り返ってみると、本当にありがたいものだと思います。

小笠原は非常に面白いところですね。きれいはいきれいなのですけれども、でもやはり、そういう人間的な面で、こういう、日本の中でユニークな歴史のあったところで、私は非常に興味深いなあと思ったんです。もともと入植者、住み着いた人が日本人ではなくて、石原先生が説明したように、アメリカとかヨーロッパとかハワイなど、いろいろなところから集まってきたわけですよ。

そして今日、石原先生の非常に面白い指摘の一つですが、小笠原というところは19世紀に独立して、グローバリゼーションの最前線にあったという。私は考えたことはなかったんですけども、そういえば、なるほどと思いました。この時期、19世紀から20世紀の初め頃にかけて、いろいろな国々が太平洋に眼を向けて、やはり植民地などを作りたかった時期でしたね。

しかし、小笠原諸島に住んでいた人々は1876年までは、どの国にも支配されていなかったわけですね。それで、石原先生の言い方を借りると「国境を越える移動民」になったわけですね。

この流れが私は非常に面白いなと思ったのです。国境を越える移動民から帝国臣民になって、20世紀には疎開難民、そして戦後難民と。大切な指摘ですね。私は、いままで考えたことはなかったのですけれども、これが、なるほどなあとと思うところの一つでした。

しかし、この流れを見て、合っているなあとと思うのですが、でも、もう一つの大切なところもあるんです。小笠原は、当時の日本の中ではバイリンガルになった場所としては、ここだけなんですよ。

明治政府が1876年から結局、管理するようになりましたが、小笠原住民を帝国臣民につくり直そうと思って、しかしその原住民が異なることを認めて、異質な存在を同居させて、そして学校として、バイリンガルの、二言語を併用するシステムをつくったんです。そして昭和に入るまで、バイリンガルの流れが続きました。

だから、その国境を越える移動民が結局、移動しなくなったのですけれども、国境を越えることは、ある程度、残ったわけですね。やはり二カ国語を使うと、そういうことになるかなと思って、その様子が長く残ったわけですよ。

私の最初の辺りの小笠原の研究課題は、白秋のような作家が作品に取り入れる小笠原表象は何であったかということです。しかし、その芸術家のほとんどが、小笠原の存在の意義を捉えそこなっていたと言ってもいいと思いますけれども、同じように、白秋の研究も的外れかなと最終的に思うようになりました。

それよりも大切なのは、20世紀の半ばごろの歴史的な流れだったと思うんですよ。戦争、強制疎開、そして1951年「サンフランシスコ講和会議」で決めた琉球、奄美大島そして小笠原諸島の施政権がアメリカに譲られるということで。これで石原先生が指摘したように、「アメリカの太平洋帝国」と言ってもいいぐらいの力が広がったわけですね。

だから1946年に129名の欧米系が父島の方に戻ることが許されるわけですね。そのときに、結局、年月がたつにつれて、その言語生活もアイデンティティーも、また変わりつつあるようになったわけですね。これがもう一つの興味深いことなんですよ。私はどうしても、もっとこれを知り

たかったのです。

このときに子どもであった世代は新しい、今までにないようなアイデンティティーをつくったということです。その人たちが、いまは50代、60代になって、だんだん亡くなって、いなくなっていくのですけれども、その世代として、私は、私だけではないですけれども「Navy Generation（海軍世代）」というレッテルを付けているわけですね。

1946年から1951年までは彼らのほかに、島に人はいなかった。彼ら130名ぐらいの人たちしかいなかったわけです。米軍基地は1951年から始まります。ですから、そのときにしばらく、1830年から住み着いた先祖と同じような存在になったわけですね。

1951年から1968年までは、日本人として彼らしかいなかったんです。米軍基地があって30名ぐらいの米海軍がいました。その間1968年までに父島に住んでいる欧米系が、アメリカの国籍を取らせてくれと、アメリカの政府に3回も頼んだのですが拒否されました。

石原先生が、今日「捨て石」という言葉を使ったんですね。この小笠原諸島が、石原さんによると「2回も捨て石化された」とおっしゃっています。第1回は戦争中、帝国の総力戦のため。第2回は戦後、アメリカに施政権を譲るため。

しかし、私に言わせると、もう1回、捨て石になったかなと思っています。1968年にアメリカの当局が沖縄より先に、小笠原諸島を日本政府に返還したわけですね。そのときに小笠原に住んでいる人たち、その欧米系の扱い方は、また「捨て石」化する扱い方だと。

1966年から1969年まで駐日米国大使になったU. Alexis Johnsonという人は、退職してから『The Right Hand of Power』という回顧録の本を1984年に出しました。小笠原諸島返還のことを全部、彼は担当してきました。

彼の説明によると、小笠原諸島は軍事情上、重要ではないから別に返還してもいい。ただ、そのまま返還したくないと言うのです。何かの取引に使うべきだと思ったんですね。沖縄についての交渉では、沖縄は返還しても、やはり基地を自由に使わせてもらいたいということですから、それを得るために、先に小笠原諸島を返したそうです。やはり、その通りになりました。

だから欧米系にとっては、また捨て石になったのです。そのときに、前もって知らせがなく、2、3ヶ月前、急に返還されるという通達があったわけです。

2009年に、私は初めて父島に行ってみたときに、初めてこの歴史を知りました。私の目の前で、1830年に住み着いた人たちの子孫がいたのです。この3回も捨て石となった人たちの体験を聞いて、私はどうしても感動せずにはいられなかったのです。

研究よりも、やはり生きているうちに、この人たちのドキュメンタリー映画を撮った方が意味があるかなと思って、私は別にこれという資格はないのだけれども撮ろうと思って、いままで9カ月ぐらいかけたのですけれども、そのプロジェクトがある程度、進んでいます。

ドキュメンタリーを撮ろうとしているのですけれども、別に上からその語りを撮るのではなく、できるだけ彼らだけに自分らの立場から、その体験を教えてもらおうという構想なんです。それがうまくいけば、いままで書かれた歴史の中で、いつも他者として扱われた欧米系が中心になって、他者にされた経験を伝える機会になると私は見なしています。

この連続講座の《グローバル・ヒストリーズ》というテーマに戻りますけれども、欧米系中心の歴史は、たいてい国民国家中心の歴史物語に忘却されがちなものなのだと私は思うんです

ね。森先生がおっしゃるように、歴史の外部に存在するようなものだと、私の把握が正しければ、そう思っています。

実際に忘却されがちだという証拠としては、例えばアメリカに行くと、アメリカ人に、1945年から1968年まで小笠原諸島、アメリカではBonin Islandsと呼ばれますけれども、そのBonin Islandsがアメリカの領土になっていたということを知っていますかと聞いたら、誰も知らないという返事が出るわけですね。日本でだって、覚えている人は非常に少ないと思います。私の教えている学生層の中で知っている学生は、皆無に近いと言ってもいいと思うんです。

だから、崎山先生が《グローバル・ヒストリーズ》というテーマを提案したときに、私はうれしかったんです。やっと、こういう歴史を伝えるようになると私は思ったんですね。今日の報告の二つともが非常にうまく、その方向に行っていると私は思います。

石原先生は近代の日本国家の歴史を、小笠原諸島や硫黄島の住民の観点から伝えようとしているわけですね。どれだけ彼らは、やられたかというような話になるんですけども、その中で、彼はタイトルに「眺める」という言葉を使っているのです。これが象徴的というか、意味深いものだと私は思うんです。森先生が言う「奄美の沈黙の歴史」につながるのではないかと私は思います。その「言われない歴史」、「話せない歴史」のようなものになるのだろうと思ったんです。

森先生は、歴史学の方法論を立てようとしているのではないかと思うのですが、歴史の哲学でありながら、樹立しようとしているのは歴史学の倫理ですね。その第I列から、一貫して倫理が働いているわけですね。主体と他者、自と他、selfとotherを、いつも視野に入れようとしているように感じました。森先生の知識は深いし、正直に言えば私の理解の範囲を超えています。非常に興味深いもので、もっと読みたい、もっと勉強したいと思います。

これから質疑応答に入るのでありますが、お二人にお願いしたいのは、お互いの報告について評価していただきたいと思うんです。おそらく内容も目的も、かなり違うと言っても、やはり同意する共通点も多いと思うんです。どういうところを評価するのか、あるいは意見を異にするのはどういうところなのかを聞きたいですね。

最後に、ひょっとしたら笑われるかもしれませんが、非常にナイーブなことをお聞きしたいんですけども、この「グローバル・ヒストリーズ」という、わざと「ヒストリーズ」と複数にした概念を妥当と認めるならば、どういうふうにして、このグローバル・ヒストリーズの歴史観点に対する認識を使って、私たちが実際に実存している世界に影響を及ぼすのか、やはりビジョンがなければ駄目だと思うものですから、そういうビジョンを教えてくださいたいと思います。

私のコメントは以上です。ご静聴ありがとうございました。

(コメント終了)

お詫びと削除について (P64-P70)

本紀要(『立命館言語文化研究』23巻2号)、P64の34行目からP70にかけての「討論」及び「質疑応答」の箇所について、発言内容を発言者本人の確認がないまま掲載を行ってしまいました。

本来であれば、立命館大学国際言語文化研究所編集委員会の責任において、発言者への内容確認を行った上で掲載すべき箇所である為、削除させていただきます。

関係する方々に多大なご迷惑をお掛け致しましたことを心よりお詫び申し上げます。

読者の皆様におかれましては、何卒ご理解を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

立命館大学国際言語文化研究所